



冬のカナダ取材する北日本放送の取材チーム。

巨大なトレーラーダンプに流し込んでしまふ。この除雪機動車の一団が、ゆっくりと走りながら、歩道と車道の雪をすっかり片づけてしまふ光景は、壮観であつた。雪は出勤時間前に運び去つてしまふので、どこにも車の渋滞は見られなかつた。

セント・ローレンス川にかかる巨大な橋は、中央部の橋のらん干が開き、トレーラーダンプが横づけではなく、橋をしゃ断する形で雪をまっさかさまに川にはおり込んでゆく。それでいて、車は特別の支障もなく、二車線のまま流れている。このグレートブリッジを思いつき、設計したのは誰なのか、聞き出すのを忘れてしまつた。

* * *

保険会社のプロモーション・ディレクター、ビエール・レクレア氏の家を訪問した。グレートウエストの閑静な森に囲まれた住宅地にあるレクレア氏の家は、寒冷地でも快適に生活できるように設計され、学ぶところが多かつた。冬の寒さを気にしない、むしろクロスカントリー

など冬のスポーツが楽しめて冬が大好きというニコル夫人。こたつに丸くなる富山とは大違いである。

十七、八世紀のヨーロッパと見違える古い建物がよく保存されているケベック市で、雪のカーニバルを見た。

撰氏マイナス二十度という寒さだが、カーニバルを見るために、多くの観光客が国内各地やアメリカ、そしてはるばる海を越えて世界中から集まつてきていた。さまざまな氷の彫刻や競技だけでなく、古い街の情緒に引かれてくるのだろうか。

カナダのクリスマスには、幾つもの顔がある。世界の各地からこの北国に住みついた人々は、先祖を偲ばせる自分たちのクリスマスをそれぞれに持っている。

昔ながらの最も素朴なクリスマスは、頑固に守っているのは、アイルランドやイギリス系の多いニューファンドランドだ。真夜中のミサ。仮装した子供たちが、夜の街を歌い踊りながらパレードし、年寄りや病人のいる家を訪問する。

フランス系の多いケベック州では、何週間も前から家族全員で家やツリーを飾り、キリスト誕生のミニチュア・シーンを作る。イブには肉を避けた簡単な食事をとり、ミサに出かける。帰宅後、友人や親類縁者一同が集まってプレゼントを交換したのち、一年で最大の馳走——食前酒、オードブル、ミート・タルト、七面鳥やあひる、野菜、サラダ、フルーツケーキに舌鼓を

カナダのクリスマス

カーニバルの規模は札幌のほうが、ずっと大きい。だがケベックのカーニバルは、何といつても楽しい。寒いけれど、ゆっくり歩きながら見ていたい——そういう雰囲気がある。カーニバルは、市民だけで運営していると聞いた。取材にに応じてくれた実行委員会の人はみんな陽気で、気さくだった。

祭りの広場を埋めつくした人々は、リズムカルな音楽にあわせて踊っている。もつともマイナス二十度では、じっとし

打つ。

イタリア系のサンタクロースは、ひげのおじいさんならぬおばあさん。良い子はプレゼントを貰えるが、悪い子にはひとかけらの石炭しかくれない。

オランダ系の人々は、プレゼントをイブの二週間も前、聖ニコラス（サンタクロース）の日の十二月六日に交換する。

トロントのメトロ動物園では、動物たちにもクリスマスはやってくる。十二月二十六日、サンタたちが大勢の見物人を引き連れて、動物たちにプレゼントを配って歩くのだ。

インディアンと欧州系との混血、メテイスの流れをくむ家々では、クリスマスは一族が親交を深める日だ。十二月二十四日、男たちはライフルの祝砲で祝宴の開始を告げ、以後二週間にわたってお祝いが続く。モカシンをはき、サッシュヤ

ろという方が無理。白い息をはきながら顔を紅潮させて踊る人々の表情は、いかにも楽しそうだった。

この街の、観光客がつかめた一角は、なぜか、飛驒の高山の、小粋な土産店や茶店のならば、趣味的な古い街並みに似ていた。

冷たい都市開発ではなく、常に人間を考え、人間が安堵できるカナダの街づくり。私はそのことに限りなく心をひかれた。

ビーズの装身具で正装した一族が、夜明けまで歌や踊りで過ごす。

クリスマスの次に人々が待ちこがれる冬の一大イベントが、二月のカーニバル。ケベック市では全市をあげて雪と氷の彫刻コンテストや競技大会を十日間にわたって繰り広げる。またスノーゴルフや水上野球、障害物スキーが呼び物のBC



州バーノンズのカーニバル、かんじき競走、モカシンダンスなどで知られるマニトバ州セントボンフェスのボヤジャー祭り——いずれも戸外で冬のユーモアを楽しむ。カナダには、ホワイト・クリスマスと雪祭りがよく似合う。